件の多い春だった。思いも寄らないことに、思いがけない災難はかえって習慣化した嘘や逃げ口上を処罰し、汚職高官を一掃した。これは共産党が政権を握って以来なかった措置で、これより前には往々にして路線闘争があったときだけ免職がなされ、高官となった失脚者が時にはまた違うところで抜擢されるという情況も出現した。この果敢な決定は民衆の全面的な支持を勝ち取り、共産党に対する信頼を増した。人々はこれを契機として政治の民主化の進展が加速するように、首を長くして待ち望んでいる。

これまでいかなる進言でも達成できなかったものが、意外にも天災によって促進され、このために高い代価を支払うことになった。これは余儀なくされた選択であった。しかし李先生が倦まず弛まず求めたのは、主動性を発揮して、最小の代価で、一歩一歩体制内部から、憲政を実現するという理想ではなかっただろうか。

幕を閉じるこの時が、どうして序幕の開幕でないことがあろうか。

（邦訳　六鹿桂子）

◉追悼　李慎之

李慎之先生を訪ね帰り、その急逝を知る

張　琢

「文官は直諫に死し、軍人は戦争に死す」。中国の専制の歴史の中で、とりわけ暗君らの暴虐政治の時期においては、無数の無念の死を遂げた忠誠心あふれる烈士が出て、人々に敬慕された。その中の何人かは「果てしなく大きい皇帝の御恩」を受けたり、あるいは偶然に思いがけない幸運にあったりして、屈しても死なず、尚まだ憤りを述べる気概があれば、人の心を揺さぶる絶唱を残した――「屈原放たれ、乃ち離騒を賦す」（屈原は戦国時代楚国の王族。讒言によって追放された―訳注）。

中国共産党の歴史からみると、残酷な党内闘争の中で、

毛主席のお蔭で――そのお蔭で人の頭はニラとは違うこと、ニラは切っても生えてくるが、人の頭は切ってしまうともう生えてこないということが分かった――「間違いを犯した」人々、たとえば「右派分子」「右傾日和見主義分子」「反党分子」の人々に対して、一般的には「一人も殺さず、大部分を勾留しない」という「寛容政策」を採って、命をとどめさせ、労働にあたらせ、同時に生きた家畜として留め置いた。その中には、様々な苦難や官職・俸禄の誘惑はあったものの、当初革命に参加し入党した時に持っていた民族のために、社会を解放し自由と民主を実現するという理想を堅持して捨てない志士たちは、機会さえあれば、自らの心身を蹂躙された過程と感慨とを吐き出して、新たな叫びを発し、社会の進歩を引き続き推進した。このような人は「革命」の煉獄の中で現代の屈原となった。我々がお別れしたばかりの李慎之先生はまさにその中のお一人である。彼の『風雨蒼黄五十年――国慶節の夜の独り言』は現代の『哀郢』(屈原が追放されて九年後、郢都を思って作った作品――訳注)である。

李慎之先生の一生における中国共産党と中国社会に対する貢献を見るに、私は主に三点あると考える。時間をおって配列する。

一、前後長期間にわたって新華社の『参考消息』の編集活動を担当し、毛沢東をトップとする共産党高級幹部のために「一日三『参』」の中国国外のニュースを提供した。彼はこのために責めを受けた――「内部参考資料を利用して中央に影響することを企てた」ことが第一番の罪状となり、「ブルジョア右派分子」として叩かれたけれども、その反面、ここにはその仕事の成果が垣間見られるのである。当時この資料は高級幹部しか見ることはできなかったが、実は客観的にはすでに潜在意識の面で新たな啓蒙の無自覚な始まりであった。

一九五七年以後、『参考消息』はもとの刊行物を基礎に新聞紙型簡易版に編集され、次第に発行部数を拡大し、一般の幹部や大学生も皆読む機会を得た。刊行された文章は当然すべて厳格にふるいにかけられたが、多くのものは海外メディアの中国の積極的な面に対する反応やあるいは「外向けに話をしながら国内向けに聞かせる」毛沢東など中国の指導者の外国の客人に対する談話の類である。しかしニュースが缶詰より厳格に封をされた厳しい時代にあっては、これはすでに毛沢東が堅持し続けた網の一方を開けておくという徳政に数えることができよう。読者は時には行間から編集者が意図して(毛が特別な意味を込めることを経て)あるいは無意識に漏らした重要なニュースや中国上層部の政治の内幕のかすかな手がかりが窺えた。毛沢東の城は極めて深く、一部の意図は数年、はなはだしいものでは数十年も隠しておくことができたが、時には彼はまた極

めて率直でもあった。一九六〇年代半ばのある日（具体的な日付はもう正確には覚えていない）の『参考消息』だったと記憶しているが、毛沢東がフランスの『フィガロ紙』主筆と接見した時の率直な言葉が載っていた。「私は康熙帝であり、雍正帝であり、乾隆帝である。私はルイ一四世であり、ルイ一五世であり、ルイ一六世である」。

「文革」時期に「五・七」幹部学校のあの世間と隔絶した環境の中で、私たち「幹部学校」の学員もまさに『参考消息』から漏れ出た話の一つ、毛沢東が天安門の楼閣でエドガー・スノーと接見した際に「〝四つの偉大〟は嫌いだ」（〝四つの偉大〟とはすなわち林彪が『毛主席語録』の中で提起していた毛に対する敬称を集大成したもので、〝偉大なるリーダー、偉大なる指導者、偉大なる統率者、偉大なる舵取り〟である）と述べたという話から党内闘争の表面化と別の政治的大地震のおとずれを推測しえたのである。当時の『参考消息』はすでに毛沢東が国外のニュースを利用して、婉曲に幹部や知識人にある種の政治的暗示と動向を示す独特な道具となっていた。

上述の二例は、どちらも李慎之先生が新華社在任期間にあったことではない――彼はこの時すでに右派分子として、下放され、労働にかり出されていたからだ。しかし彼の在任期間の苦労は、『参考消息』そのものの特殊な機能と一脈あい通じるものだった。改革開放から二五年後の今日、中国国内においては報道の自由になおも制限があるものの、海外の中国人は各種の情報ルートを得ており、もはや気にかける暇がないほど多量化している。しかし多くの人は依然として『参考消息』を偏愛している。私個人について言えば、日本で教壇に立っているが、現在でも北京のすまいで『参考消息』をとっており、毎年休みまでとっておいて、帰国したときに享受している。昔「情報貧乏」の苦しみを長い間飽きるほど味わった中国知識人の『参考消息』に対するこのようなコンプレックスは、「情報氾濫」の時代に生活している今の若い人にはとても理解しがたいことであろう。

第二点は、私が思うには最も実際的で最も重要な点である。改革開放後、李慎之先生は自分の国際知識の累積を発揮する機会を得て、ポスト毛沢東時代の中国の外交路線や政策の立案に貢献した。

李慎之先生の言い方によれば、毛沢東時代の外交政策は三つの要素によって決定された。(1)イデオロギー、(2)民族利益、(3)毛沢東個人の偉大な考え。この三要素は徐々に、また交互に作用するので、はっきりと分けることはとても難しい。総じて言えば、初期にはイデオロギーの要素がかなり強く、晩期には個人の要素がかなり強い。民族利益の要素は終始貫徹していたはずだが、毛沢東の時代が終わるまでずっと隠れていて表に出なかった。これと比べて、鄧小平時代は国家の利益がはっきりと現れ、イデオロギーが

薄れた時代だったということができる（李慎之『中華人民共和国の外交を語る』二〇〇二年、南京）。この総括は客観的で正確である。

中国外交政策が転換する過程における李慎之先生の貢献は、すなわち、(1)一九七九年二月鄧小平が訪米する時に顧問の任にあたった、(2)一九八二年当時の中国共産党中央総書記である胡耀邦のために中国共産党第一二回全国代表大会報告「社会主義の現代化建設の新局面を全面的に切り開く」の国際部分を起草した、(3)一九八四年一月趙紫陽首相が訪米する時の特別補佐の任にあたったことである。鄧・胡・趙が中国共産党第一二回全国代表大会後形成した「三頭立ての馬車」のために、李慎之は彼の当時の特殊な身分を利用し、自分の国際知識で中米関係の転換、とりわけ中国共産党の外交政策の転換に重要な役割を果たした。彼が起草に参加した中国共産党第一二回全国代表大会報告は、中国共産党の歴史上、中国外交の本来の出発点は中国の「国家利益」であり、もはやプロレタリア世界革命の国際主義を声高に唱えず、いかなる大国とも連盟を結ばず、独立自主の外交政策を実行することを明確に打ち出した。

第三点は、彼は自分が中国共産党に加入して半世紀あまりの心の歩みに対して、誠実に反省し、多くの文章や談話を発表し、「党の文化」に対する分析を通して、新たな啓蒙を進めた。これらはすでに多くの論者が賞賛しており、多言は要すまい。

ここで私個人の感想を少し述べたい。李慎之先生が中国政治の民主化を実現するために、挫折すればするほど奮闘し、長期にわたって頑張り続けたその精神に対して、心から敬服する。しかしわずかに遺憾な点がある。それはほかでもなくその中に深い経済分析と社会分析が欠けていることで、だからその観点は偏っていると常々感じている。しかもこれはまさに今回のインタビューの中でしばしば話が及んでいた彼の親友の北京中国共産党内の別の二人の長老――于光遠と李鋭の長所なのである。三人の着眼点は異なっているが、目標は一致しており、互いに啓発しあい、貴重な人材が集まったことで、互いがますます成長し、党内の民主化と社会の民主化とのよい循環を共に促した。

才能ある人材がいさえすれば、河は澱むことなく流れ続ける。李慎之先生が残した願いを、生きている人は必ず一歩一歩実現できるに違いない。

安らかにお眠りください、李慎之先輩。

（二〇〇三年七月一日）

（邦訳　六鹿桂子）